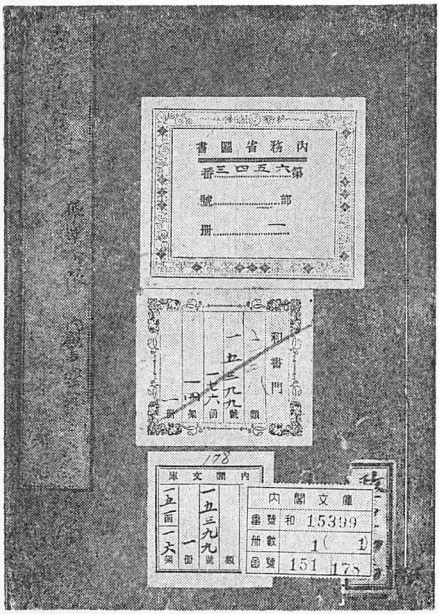
江戸幕府の医療制度に関する史料（五）

―文政度『官医分限』―

香取　俊光

先回までに、国立公文書館所蔵の元禄十三年（一七〇〇）『侍医分限記』・文化八年（一八一一）六月禄『官医分限帳』などを紹介した。今回は同館所蔵の文政度（一八一八～一八二九）『官医分限』請求番号一五一―一七八）を紹介する。

表紙には「官醫分限　猿楽分限　内殿申楽記」の題字があり、



一丁から十二丁裏までが官医分限で、十四丁以降が猿楽関係のものである。「官医分限」の中にも一丁から十丁裏までが官医分限で、十一丁の表から裏にかけて「新規被召出」と題された新規登用の医師の書き上げがある。

この冊子には、編集年代が明記されていない。「新規被召出」を見ると、文政八年五月十九日以降に召し出された佐藤道仙以下が見える。これから考えて、文政八年以前の著作である。この冊子に登場する医師が家を継ぐ記事を『続徳川実紀』（以後『続実紀』と略す）で見ていくと、次のようである（姓名の前の＊印は本冊子に見える医師）。

文政元年五月三日　千賀道有―→養子　＊道栄
十月四日　伊藤高仙―→子　＊高益
十一月廿九日　＊津軽玄意―→子　玄哲
十二月廿七日　兼康栄庵―→子　＊栄元
二年五月三日　石丸桃元―→養子　＊桃椿
坂本養安―→子　＊養琳
十二月十二日　＊栗本瑞見―→子　元哲
三年六月十三日　＊川島宗端―→子　宗哲
五年二月四日　中村玄程―→養子　＊永琢
九月六日　＊杉枝仙良―→子　＊仙叔
六年十月五日　笠原玄竈―→養子　＊玄端
＊池原雲山―→養子　雲仲
＊増山養甫―→子　養誠
七年十二月廿七日　＊小嶋昌与―→養子　梅岡

八年十一月七日　＊坂本養順――→子　養景

このように、文政年間の最初の時期に家系を引き継いだ者もいるし、六年十月五日のように引き継いだり、引き渡したりしている。『続実紀』では明確にならないが、以上から文政年間しかも七年以前に編集されたことが確認できる。

本文の基本は持ち高または俸禄の高と医師の名が「イロハ」順に、全員ではないが屋敷地が書き上げられている。それに、医療科目や「典薬頭」・「代々寄合」が朱によって加筆されている。本文の医師の総計は二百三名である。この内、薬苑預の藤林・芥川と「外」の項の小野・小川の四名を除いた百九十九名を医療科目毎に集計すると、本道（内科）百二十七名、外科二十五名、鍼科十四名、小児科二十一名、口科（歯科）六名、眼科五名、痘科一名である。

新規登用の分は、文政八年から弘化二年（一八四五）にかけて医員に登用された医師十三名が記載され、本文の記載とは違い登用の年月・登用された役職（奥医師・奥詰など）と禄高・名前の順で書かれている。

翻刻に当たっては、なるべく原文にしたがった。（　）内は筆者の注で、名前の後の数字は『新訂増補　寛政重修諸家譜』全二十二巻（続群書類従完成会、東京、以後『諸家譜』と略す）に該当する家系の巻数と頁を示した。以下に示すものは朱書である。

イロハ順の「イ～ス」。医療科目の「外・鍼・小・口・眼・痘」。「典薬頭」・「代々寄合」。

（「」内表紙）

「官醫分限　猿楽分限　内殿申楽記」

イ

一　千弐百石　典薬頭　八丁堀全六丁　今大路中務大輔（十―八八）

小一　弐百俵三十人扶持　伊藤　高益（二一―二九九）

痘一　弐百俵　柳原岩井丁　池田　瑞仙（二二―二四一）

一　百五十俵　木挽丁元松村丁　池田　玄隆（十九―三〇一）

一　弐百俵　佐久間町　池原　雲山（二二―二三〇）

一　同　お玉ヶ池　生野　松寿（二十―一二）

鍼一　百俵　銀座弐丁目　石坂　宗哲（なし）

一　弐百俵　石丸　桃椿（二二―一一一）

一　五百石　代々寄合　紀伊国橋松村町　井関　正伯（十九―二〇九）

一　七十人扶持　（分家）井上　三菴（二二―三四四）

一　三百石　代々寄合　（本家）井上　俊良（二二―三四二）

一　弐百俵　深川松村町　井上　玄潭（十九―一三五）

ハ

一　五百石　本丁三丁目　塙　宗悦（十七―二二六）

一　五百石　塙　道与（二二―二八九）

一　弐百四拾石八人扶持　築地松村丁　林　元適（十九―二三三）

一　弐百俵　林　宗潭（二十―一三七）

一　弐百俵　秦　寿命院（十―三二七）

一　弐百俵　服部　了元（二二—二八八）
鍼一　百俵三人扶持　畠山　隆川（二二—二六七）
眼一　百俵　浅草大川端　土生　玄順（なし）

ニ

一　弐百俵　丹羽　好徹（二二—一一）
外一　同　西　玄哲（二二—二〇九）

ホ

口一　弐百俵七人扶持　湯嶋壱丁目　堀本　一甫（二—一〇一）
口一　百俵五人扶持　八丁堀永沢町　本賀　順昌（二一—三九八）

ト

口一　三百俵三十人扶持　東　宗朔（二十—二四五）
一　三百俵　代々寄合　土岐　長元（十九—一七三）
一　百六十俵　深川乃手町三丁目　土岐　宗珉（十九—一七一）

ヲ

一　千石　岡本　玄治（十—九四）
小一　三百五十俵　飯田町　岡　了節（十九—三九六）
一　弐百八十俵十八人扶持　岡　大順（十七—二二二）
小一　三百石　岡　道漠（十七—二二四）
一　弐百俵　神田松下町　岡井　運南（二二—二五九）
外一　弐十人扶持　浅草東仲町　岡田　東明（十九—一〇五）
一　三百石　芝二葉丁　小川　菴（二一—一三四）
小一　三百俵　小川　玄貞（二十—一三三）
小一　弐百俵　本材木丁弐丁町　本所松坂丁一丁目　小野桃仙院（二二—二三八）
外一　弐十人扶持　小崎　仙菴（二一—二四九）

一　弐百俵五人扶持　神田松枝丁　大渕　祐真（二十—一四）
一　弐百俵　九段坂下　大八木傳菴（十九—三六六）
一　同　神田松枝丁　大石　玄沢（二十—一二四）
一　三十五俵五人扶持　四谷塩丁　大石　元菴（十九—三九七）
一　三百石　太田　寿菴（十七—三三六）
小一　弐百俵　太田　元達（二二—二三八）

ワ

鍼一　三百俵　和田　春長（二十—三四五）
眼一　百俵五人扶持　□□　渡辺　立閑（二十—四四）

カ

一　五百石　河野　良以（十二—二三）
外一　百俵十人扶持　（分家）川嶋　宗端（十七—二二九）
外一　十五人扶持　（本家）川嶋　周菴（十七—二二八）
一　壱百俵　片山　宗元（五—三六七）
外一　同　桂川　甫周（二一—一三）
一　同　勝本　理菴（二二—一〇九）
一　同　浅草田原丁　上領　玄碩（十八—四一八）
眼一　同　（分家）笠原　玄瑞（十—四五）
眼一　百俵十人扶持　（本家）笠原　養泉（十—四四）
口一　百俵五人扶持　飯田町　兼康　栄元（二二—三四〇）

ヨ

一　七百石　吉田　法印（七—二二六）
小一　五百石弐十人扶持　南鈴治丁一丁目　吉田　策菴（七—二三六）
一　三百石　吉田　梅菴（十九—三七八）

外一　三百俵　吉田　自謙（二二—三五四）
一　同　吉田　長禎（七—二三八）
小一　弐百弐十五俵　木挽丁松村丁　吉田　栄全（四）（十八—三二四）
一　弐百俵　吉田　快菴（五—二六九）
小一　同　西久保神谷丁　吉田　貞順（七—二三八）
小一　同　飯田丁中坂　吉田　桃悦（十九—三八〇）
小一　同　吉田　元夏（十九—三七九）
鍼一　弐十人扶持　吉田　秀哲（二二—一〇八）
一　百俵十人扶持　弁慶橋　吉益　元同（二十—八四）
一　五百石　余語　故菴（十七—三二七）

タ

一　千石　竹田　法印（十二—一六七）
一　四百俵　（分家）武田　叔安（三—二一三）
一　百人扶持　（本家）武田　道安（三—二一一）
一　五人扶持　中橋廣小路　竹内　英仙（十九—二八九）
一　三百石三十人扶持　六軒堀　高木　玄斎（五—四一八）
小一　弐百俵　中橋廣小路　誓願寺丈大和丁　高嶋　朔菴（十九—三三七）
一　三百三十五俵　田村　長元（五）（十八—一八三）
一　三十人扶持　田村　元雄（なし）
一　弐百俵　糀丁弐丁目　田代　宗順（二十—一三五）
一　百五十俵　芝内町　田中　俊哲（十九—二六八）
一　十五人扶持　箱崎丁弐丁目　田沢　宗伯（十二—一五五）
一　弐百俵三十人扶持　（本家）大膳亮好菴（二十—二九〇）
一　弐百俵　（分家）大膳亮玄理（二十—二九一）

一　同　多紀　安元（十八—一八〇）
一　同　中坂下　瀧野　為伯（二二—一一〇）
一　七百石　橘　隆菴（二十—三六二）
一　百俵七人扶持　伊達　本覚（十七—二二九）

ソ

小一　三百俵　添田　道周（十九—二九五）
一　弐百俵　築地小田原丁（分家）曽谷　長順（十三—三）
外一　六百三十石　（本家）曽谷　伯安（十三—一）

ツ

外一　弐百俵　（分家）津軽　意伯（十二—八一）
々一　同　（本家）津軽　玄意（十二—八〇）

ナ

一　千五百石　半井修理太夫（十一—一九二）
一　拾人扶持　神田橋本町四丁目　半井　策菴（二十一—一九）
一　五百石　奈須　玄蠱（十八—三〇五）
一　三百俵十人扶持　左内町　長嶋　玄張（二十一—八）
一　弐百俵　長尾　全菴（二十—三八〇）
一　同　成田　活菴（十八—三四二）
一　同　神田松枝丁　中川常春院（二一—三一一）
一　弐十人扶持　元誓願寺丈　中村　永琢（二十一—二六）

ム

一　五百石　村田　長菴（二十—一）
小一　三百六十俵　横田町　村上　良知（二二—七三）
外一　弐百俵　八丁堀長沢丁　村山　自伯（二二—三〇）

外一　三十人扶持　村山　春重（二二—三一）
一　弐百俵　佐久間丁　村岡　玄超（二一—一三五）

ウ

一　三百俵　甲府　宇佐美久甫（二一—三〇四）
鍼一　弐百俵二十人扶持　上田　東暦（二十—三七一）
一　弐百俵　北本所松倉町　内田　玄寿（十六—八〇）

ノ

一　弐百俵　野間　玄琢（十三—三五〇）
一　高弐百俵　□□木挽町松村丁　野呂　元順（二二—二〇九）

ク

一　弐千石　代々寄合　久志本左京（十八—一一二）
一　三百石　久志本主水（十八—一一〇）
一　三百俵　久志本右近（十八—一〇七）
一　弐百俵五人扶持　青山若松丁　代々寄合　久保　潤貞（二十—七七）
一　三百石　栗本　瑞見（十九—三四七）
一　弐百俵　本所相生丁壱丁目（鍼）　栗本　杉菴（二二—三九）
外一　同　北八丁堀　栗崎　道樞（二十—三六五）
一　同　松坂丁　熊谷　弁菴（二十—二〇八）

ヤ

一　八百石　佐□丁三沢丁　山田　立長（十九—二八八）
一　三百俵　山田　宗悦（二二—二七六）
一　同　京橋細屋丁　橋本町四丁目　山添　宗安（二十—一七）
鍼一　弐百俵十人扶持　山本　宗仙（二一—三四三）
一　弐百俵　山本啓徳院（二二—三五二）
鍼一　同　牛込ウラ店　神田明神下　山崎　宗運（二十—一〇〇）
一　五十人扶持　京都　山脇　道作（二十—三三九）
一　八十俵　日光　山中療病院（なし）
一　六百石　神田松本丁　壱丁目代地　谷田（辺カ）　泰安（二十一—九五）

マ

一　千九百石　曲直浜養安院（十—九二）
一　弐百俵　築地小田原丁　弐丁目　曲直浜寿徳院（十九—四百）
鍼一　六百石　増田　寿得（二一—一二〇）
外一　弐十人扶持　増山　養甫（二一—三三四）
外一　弐百俵　木挽丁松村町　牧野　升朔（二二—二八）
小一　同　町谷　元悦（二二—二三四）
一　百五十俵　前田　崇績（二二—二四六）
眼一　百俵五人扶持　中橋廣小路　馬嶋　瑞安（二二—二三四）
一　弐百俵　木挽丁松村町　松井　長菴（十九—二五九）
外一　同　飯田町　松崎町　丸山　宗圓（二十—六二）

フ

一　七百石　船橋　宗迪（二十一—一六）
一　弐百俵　八丁堀紺屋丁　全六丁跡地　藤本　立安（二二—一三一）
一　同　福井　立助（十九—三三三）
外一　十五人扶持　米沢丁一丁目　古田　瑞玄（十五—八三）
外一　弐十人扶持　傳通院丈　古田　休真（十五—八二）

コ

一　五百石　高麗　雲祥（二十一―四七）

一　百五十俵三十人扶持　小嶋　播菴（十九―二二三）

一　弐百俵　関口村臺町　小嶋　昌与（十九―三九三）

小一　同　飯田丁中坂　小嶋　安順（十九―三九三）

一　同　三軒茶屋町　小柴　玄碩（十八―四〇六）

一　同　三河町三丁目宿町　小森　西倫（二二―三四一）

ア

一　六百石　上槇町　安倍長徳院（十―三九九）

ロ一　弐百俵　松枝丁　安藤　安益（二二―八一）

一　同　天野　良雲（二一―二九二）

一　百俵五人扶持　浅草諏訪町　赤松　休菴（二十―四二）

サ

一　五百石　坂　上池院（五―二六四）

一　弐百俵　本石丁　坂　真菴（五―二六四）

鉞一　同　坂　玄道（五―二六七）

一　弐十人扶持　坂　立節（五―二六八）

外一　七十俵十人扶持　（本家）坂本　養琳（二一―三六八）

外一　百六十七俵　（分家）坂本　養順（二一―三六九）

一　五百石　本郷丸山新丁　佐合　益菴（二十―三六九）

鉞一　三百俵　（本家）佐田　玉春（二十―三九）

鉞一　同　（分家）佐田　玉寿（二十―三九）

外一　同　佐藤　山寿（二一―一七一）

キ

一　五百石　木村　三圭（二一―二一四）

小一　弐百俵　貴船若松丁　木村　玄長（十九―二七一）

一　三百俵弐十人扶持　新白金丁　木下　道（十七―二一四）

一　三百五十俵　喜多村安正（二一―二四六）

ユ

一　弐百俵　湯川　寿三（十九―二九六）

一　同　八丁堀永沢丁　遊佐　東菴（二一―二一七）

ミ

一　五百石　三雲施薬院（十八―一七七）

一　弐百俵　峯岸　春悦（十八―三八七）

小一　同　宮崎　立元（二二―二三九）

一　百俵三十人扶持　宮村　英菴（二十―二六四）

シ

一　三百俵十人扶持　渋江　長伯（十―四六）

一　弐百俵　塩田　宗栄（二二―二六五）

一　弐十人扶持　塩谷　桃菴（二一―六一）

小一　弐百俵　神田小原丁　柴田玄泰（なし）（十八）

小一　同　篠崎　三伯（二二―二二二）

外一　同　相生町弐丁目　鹿倉　以仙（二二―一一二）

鉞一　十五人扶持　嶋崎　栄仲（二二―一七八）

ヒ

一　三百俵　小傳馬上丁　平田　道祐（十七―二一六）

小一　弐百俵　人見　又玄（十七―二二〇）

外一　同　橋本町四丁目　廣井　孝達（二十―五五）

一　三百俵　平井　省菴（二十―三六二）

モ

一　七百石　森　宗行（二二―八八）
一　五百石　森　昌益（十八―三〇七）
一　三百俵　森　雲悦（二十―八〇）
一　弐百俵　木挽丁松村町　森　杏栄（十九―一一）
同　白金今四□丁　望月　三悦（十一―六九）
ロ一　百俵弐十人扶持　下谷岩堀但馬守上屋（本家）　本康　宗圓（二十―二一五）
一　百俵五人扶持　赤坂新丁三丁目（分家）　本康　宗寿（二十―二一六）

セ

一　三百俵　千田（ちだ）　玄知（十九―一九七）
外一　弐百俵　神田松永町（本家）　関本　伯典（二十―二八七）
外一　百俵　三河丁新道（分家）　関本　伯典（二十―二八八）
一　弐百俵　千賀（ちか）　道栄（十九―三三一）

ス

一　千百石（本家）　数原　通玄（二十―三五八）
一　五百石弐十人扶持　数原　浄菴（二十―三五七）
一　五百石　飯田丁中坂（分家）　数原　玄仲（二十―三六〇）
一　弐百俵　杉本　忠温（二十―二一八）
一　同　糀丁六丁目　杉浦　玄徳（二十―三七六）
鉞一　同　柳原松波町　杉枝　仙叔（二一―三三八）
一　三百俵　両国吉川町　須田　昌達（二十―八三）

御薬苑預

一　百俵　京都　藤林　道格（七）（十八―八八）
一　百俵弐人扶持　芝七軒町　芥川小野寺（二十―二七九）

外

一　拾五人扶持　小野　蕙畝（八）（なし）
一　弐十人扶持　小川太左衛門（なし）

新規被召出

文政八酉年五月十九日（町医師より御目見医）奥醫師百俵五人扶持　ロ　佐藤　道仙（九）
同年八月十五日（松平讃岐守家医より御目見医）御番外科弐十人扶持　外　畑中　文中（九）
同日（町医師より御目見医）同　同　外　小堀　祐真（九）
天保元寅十二月廿日（御目見医より）御番醫師格弐十人扶持　眼　樋口　三生（一〇）
同三辰九月十四日　奥醫師並弐十人扶持　鍼　芦原　検校
同六未十二月十八日　奥詰三十人扶持　多紀　安叔（二）
同八酉七月廿一日　奥醫師弐十人扶持　眼　土生　元昌
同年八月廿四日（町医師より御目見医）御番外科弐十人扶持　外　宮地　養三（九）
同年十二月十六日（御目見医より）奥詰醫師　高村　隆意
同十亥五月六日（御目見医より、小石川養生所の事精勤につき）弐十人扶持　塙　主齢
同十一子十月十七日（三浦順之助手医師、御目見医より小石川養生所附）御番醫師　外　山本　甫斎
天保十四卯六月九日（小普請医師より）奥詰三十人扶持　柴田　玄意（雄）

弘化二年二月十二日　（故番外科曽谷伯安嫡孫の思し召しを以て）小普請入百俵　外　曽谷仙菴

御薬苑預の芥川と藤林の両家について補足しておく。藤林家は、『諸家譜』第十八（八八～九二頁）によれば、大神氏の一族で系図は神から続く長い家系である。本国は九州出身だが、足利尊氏に仕え山城国横大路等を領し、初代道寿綱久（一五七二～一六五八）の時に家康に仕え、後に今大路道三に医術を学び、寛永十七年（一六四〇）十月二十八日に京都の薬園を預けられ、子孫代々引継ぎ京都に住んだ。四代目道寿守之（一七〇一～七七）が、延享二年（一七四五）に江戸に召されて朝鮮種の人参を京都の薬園に植えることと、帰京の途中に駿河国の薬園を見ておくことも命じられた。

芥川小野寺家は、『諸家譜』第二十（二七九～二八〇頁）を見ると次のようである。先祖は駿河国小野薬師寺の別当で、初代正知が家康に仕え度々の還俗の命令も辞して、請いて以後は草木の花園を司どることとなったという。この他の詳細は同書に任せ、『実紀』に見える史料を幾つか紹介しておく。三代目元正（または元政）の記事で、天和二年（一六八二）三月廿一日条に、

（綱吉）吹上の花圃にならせられ。芥川小野寺元政に銀を下さる。

とある。

四代目元風は、正徳元年（一七一一）九月廿三日条に、

薬園預木下道圓守直薬園の事をゆるされ。醫員に准ぜらる。

芥川小野寺元風白山の薬園。花園の事つかさどるべしと命ぜらる。

とある。享保三年（一七一八）十一月七日条に、

薬園預芥川上野守（小野寺カ）元風が官舎出火せしをもて。出仕をとゞめらる。

とある。同六年八月十七日条に、

小石川殿趾四万四千八百坪。こたび開墾して薬園となすべき旨。普請奉行朽木丹後守定盛うけたまはる。小普請の士岡田理左衛門安忠。芥川小野寺元風は。薬園にものうゆる事うけたまはるべし。よて篤實のもの二十人をえらび、属吏となすべしと命ぜらる。

とあり、さらに同年十二月廿七日条には、

これまで芥川小野守（寺カ）元風にあづけられし小石川の薬園に。こたび小普請岡田理左衛門安忠が新墾せし地をあはせて。四万九千六百餘坪の地。元風。安忠二人にわかちて。主管すべしと命ぜらる。属吏も此二人に隷下に分属して。いよいよ薬種を培栽すべしとなり。

と、開墾した小石川殿趾を薬園とし、芥川・岡田の両家で主管することとなった経緯が明瞭に記載されている。元文元年（一七三六）三月廿一日条には、

小石川の薬園預芥川小野寺元風に七十俵の加秩賜はり。同朋の末班につくべしと命ぜらる

とある。

五代目備元・六代目元珍について、安永四年（一七七五）二月廿七日条に、

薬園監芥川小野寺備元老免し。銀十枚をたまひ。年頃の勞を褒せられ。その子長春元珍に職を襲しむ。

とある。

芥川と小石川の薬園を司どることとなった岡田家は、『諸家譜』第十八（三四〇～二頁）によれば次のようにまとめられる。先祖は下総国岡田郷に住んでいたが、初代政亮（まさすけ）が秀忠に御膳所役（台所人）として仕え、二代目忠俊（ただとし）、先の史料に登場する三代目安忠（やすただ）も同じ勤めをしていたが、先にみた開墾の経緯から以後子孫は薬園奉行を引き継いでいくこととなった。また、文化六年（一八〇九）の『武鑑』に「薬園奉行　同心十人　岡田左門　芥川長春」、天保四年（一八三三）の『武鑑』には「薬園奉行　芥川小野寺　芥川長春　岡田孫次郎」とある。

薬園預の後ろの外の項に記載されている小川家は、文化六年の『武鑑』に「（小石川）養生所肝煎　小川又右衛門」とあり、天保四年の『武鑑』に「養生所肝煎　小川太左衛門　見習　小川鎌次郎」とある。『続実紀』天保十二年六月廿五日条に、

小石川養生所肝煎小川鎌次郎がもとにありし良意同じ肝煎となる。

とあり、同年七月廿八日条に、

小石川養生所肝煎小川良意初見し奉る。

と良意が将軍家慶に拝謁している。

次に、幕末に新規取立てを受けた医師の史料を見ていこう。『医師改革之留』（国立公文書館所蔵、請求番号二二〇―一一九）の「下ヶ札」という部分を紹介しよう。なお、「　」内は朱書で（　）は筆者の注を示す。

天保十四卯七月（二日）
被　召出奥医師　牧野備前守医師　柴田　芩菴（玄庵）（一二）

弘化四未年九月（廿九日）
被　召出奥詰医師　清水附医師　岡田　昌碩

安政五午七月（三日）
被　召出奥医師　松平薩摩守医師　戸塚　静海
「改静春院」
松平三河守医師　遠田　長庵
「改澄庵」
「当時寄合医師」松平肥前守医師　伊東　玄朴
「改長春院」
松平駿河守医師　青木　春岱
徳川賢吉殿医師　伊東　貫斎
「改瑶川院」
有馬左兵衛医師　竹内　玄洞
「改渭川院」

安政六未八月（廿二日）
被　召出奥医師　阿部賢之助（伊予守）医師　伊沢　磬安

萬延元申九月（十三日）
被　召出奥詰医師　小笠原右近将監医師　林　洞海

同年十月（廿七日）
松平陸奥守医師

被　召出御番医師　　大槻　俊斎
文久二戌八月（廿二日）　同人医師　　石川　桜所
被　召出御番医師並　　木下備中守医師
（廿一日）　　緒方　洪庵
元治元子正月於京都（廿九日）御針科
被　召出奥医師　　平塚惣検校（一三）
同年十一月（廿日）　　松平越前守医師
被　召出奥医師　　坪井　信良
右何も被　召出御扶持高三十人充被下之
文久二戌閏八月　　亀井隠岐守医師
池田　多仲
「当時奥詰医師」　　「改玄仲」
被　召出一生之内御扶持方弐拾人扶持被下西洋医学所預り
（元治元子八月十五日奥詰医師）

この外、新規取立ての史料を示すと、『続実紀』天保十二年（一八四一）十二月十五日条に辻元菘庵冬嶺（一四）が、

醫辻元菘庵初見したてまつる

と、将軍家慶に拝謁していて、弘化四年（一八四七）三月廿六日条に、

拝謁醫辻元菘菴めし出されて禄三十口を賜ふ。

と召し出しの記事がある。

また、『続実紀』文久元年（一八六〇）二月廿一日条に浅田宗伯が、

松平大和守醫師　　一　堤　愛卿
町　醫　師　　浅田　宗伯

家業出精ニ付。御序之節　御目見可被　仰付候。
右於躑躅間。紀伊守申渡之。若年寄中侍座。

と、御目見の仰せがあり、同年二月廿八日条に、

初而御目見
松平大和守醫師　　堤　愛卿
御藥　　町　醫　師　　浅田　宗伯

と、将軍家茂に拝謁している。慶応二年（一八六六）七月十六日条には、

寄合醫師　　高島　祐竜
御目見醫師　　浅田　宗伯
被召出
奥醫師

右今日上坂奥醫師被　仰付候ニ付。御休息北御入頬ニ而御前御禮。伊豫守殿御取合ニ而申上。相済而直様初伺被　仰付候。

と、召出の記事がある。同年十二月十八日条には、

奥醫師　　浅田　宗伯
一　法眼　　杉枝　仙貞

吉田　秀貞

奥醫師並　川島宗端

右被　仰付旨。於　笹之間替席土圭間。老中列席。河内守申渡之。

と、法眼に叙せられた記事がある。

文献および注

（一）石坂宗哲の曽祖父検校志米一は、盲人で杉山和一（管鍼）の門下であった。元文元年（一七三六）十月四日に召し出され、同年十月十五日に、初めて将軍吉宗に拝謁している。

（二）土生玄碩は眼科の医師で、文化六年（一八〇九）七月二十八日に松平安芸守斎賢の医より召出されている。『続実紀』同日条には、

松平安藝守斎賢醫土生玄碩某。（その他三名略）おのおの拜謁をゆるさる。

とあり、文化七年二月二十八日条には、

謁見ゆるされし醫土生玄碩めし出されて奥醫となる。

とある。しかし文政十二年（一八二九）十二月十六日条には、

奥醫土生玄碩蘭醫藥法傳授を謝して御紋服を贈りしをとがめられて改易せしめらる。その子西城奥醫玄昌父の罪によりて禄放たる。

と父玄碩の罪に玄昌が連座した記事がある。その後また玄昌が取り立てられた。

（三）岡了節の逸話が、文恭院殿（徳川家斉）御実記附録巻二（『続実紀』第二篇、三〇四～五頁）に見える。

奥醫岡了節法眼某が別荘は。墨田川牛御前の社よりさき左の方の川邊に。四面は田溝ばかりにて、一屋突然と川に臨めり。この邊りは御放鷹の場ゆへ人目に遮るものをば。御鳥見の輩むづかしく言ふこと常なり。さるに一日御狩にこの邊を成せられしとき。小納戸頭取長谷川主膳正保邦あれに見ゆるは岡了節の屋なりと申上たり。其時御詞に。了節はここより勤るや。保邦答奉るは。これは別荘と申上。又川は見ゆるや。御答に某未彼所に往き申さず。よく辯へ申さずと申上たるに。其のち御言葉もなく行過給ひしが。良久して御後へを顧みさせ給ひ。主膳と召す。御側により奉れば。了節が屋は若し川を望みがたくば。今少し高く構へんにと宣ひし。この御一言にて。御鳥見の輩むづかしく言こともならず。了節が大幸とはなりける。

（四）吉田盛方院家は初期よりの名家であるが、『続実紀』天保十二年（一八四一）五月十日条に次のような史料がある。

勘定奉行で前の長崎奉行田口加賀守喜行が長崎奉行勤務中と家事共に不正の処分に連座している記事である。

右大将殿奥醫吉田成方院咎められて奉公をめし放たれ。致仕して愼しみあるべしとなり。その子頼菴は養父かく命ぜられしによて。禄百苞を下され小普請に入れられ、薬研堀元矢之倉の居宅を其ままおさめらる。

（五）田村玄雄（一七一八～一七七六）は平賀源内の師で本草学者としても著名で、宝暦十三年（一七六三）六月二十四日に医師並に召出された。『実紀』同日条を見ると、

醫田村玄雄玄臺召出されて、生涯月俸三十口を給はり。醫員に准じて小普請にせられ。韓種人蔓の事を司どらしむ。此玄雄は。本經の学に長じ。常に諸国を渉歴し。薬材を広くもとめ出し。著述の書も少からずとの聞え有て。こたびかく命ぜられしなり。

とある。同七月二十八日条では、

小普請醫田村玄雄玄臺初見し奉る

と、将軍家治に初見した。その日記は草野冴子他校訂『田村藍水・西湖公用日記』（史料纂集、続群書類従完成会、東京）として世に知られている。『実紀』安永五年（一七七六）七月十六日条に、

小普請醫田村玄雄玄臺うせければ。其子元長某べつにめし出されて。月俸三十口を賜ひ。人蔓製する事をつかさどらしむ

と、玄雄の死亡により子の元長が跡目を継いでいる。『続徳川実紀』寛政五年（一七九三）二月五日条に、

奥詰醫田村元長子元慶見習より奥詰となる。

と、元長の子元慶が奥詰見習より奥詰となっている。

（六）柴田玄泰は、天明四年（一七八四）十一月廿九日に、

市井の醫茨木長宣某。柴田元養某。（中略）各醫術精研するよし聞示され。拜賜を給ふべしと仰付らる。

とあり、この翌月の十二月廿二日条に、

寄合醫吉田意安法印宗懌が子式部卿宗惜をはじめ、初見するもの十三人。

とあって、この日初めて将軍家治に拝謁し御目見医師となったと考えられる。享和元年（一八〇一）四月廿五日条に、

さきに謁見をゆるされし醫柴田元養某。あらたに召出され禄二百苞をたまひる西城奥醫となり元泰と改む。

とあり、同年十二月十六日条には法眼に叙された記事が見える。文政元年（一八一八）三月廿五日条に、

西城奥醫篠崎朴庵子三伯。柴田玄泰子玄英。（中略）初めて見えたてまつる。

とある。

（七）藤林道寿については、『京都の医学史（本文編）』（一一八四頁、思文閣出版、一九八〇）、杉立義一「鷹峰御薬園と藤林道寿」（『京の医史跡探訪』、七七～八頁、思文閣出版、一九八四）を参照。

（八）小野家初代の蘭山は寛政十年（一七九八）十一月に召出された。蘭山については、富士川游「小野蘭山先生と医学館」（『富士川游著作集』8、三二二～五頁、思文閣出版、一九八一）、『京都の医学史（本文編）』（一二一五頁、思文閣出版、一九八〇）、杉立義一「日本のリンネ・小野蘭山の衆芳軒」（『京の医史跡探訪』、二五三～四頁、思文閣出版、一九八四）を参照。

『続実紀』から小野家の史料を紹介すると、蘭山の孫で二

代蕙畝について文化十二年（一八一五）四月廿八日条に、

小野蘆敢（蕙畝カ）。塙検校初見したてまつる。

とあり、天保十二年（一八四一）十二月廿三日条に、

寄合醫井上玄菴。番醫谷部道玄は醫学館の事つとめ。寄合醫喜多村安齋。小野蘆畝（蕙畝カ）は同所に講書せしをもて。おのおの白銀を下さる差あり。

と医学館で講義をしており、翌十三年三月六日条に、

寄合醫小野蕙畝奥詰となる。

と奥詰医師となった。嘉永五年（一八五二）七月二日条には、

奥詰醫小野蕙畝老免致仕して褒金あり。子彦安家つぐ。

と二代目蕙畝が致仕して三代目彦安が家を継いだ。翌六年十二月十六日条には、

小普請組
小笠原彌八郎支配
小野彦安

一　同（巻物）十枚

右於醫学館。講書仕候ニ付被下之。

とあり、小普請医師（小笠原彌八郎支配）で医学館で講義をした褒美が下された記事である。四代目苓庵について（文久三カ、一八六三）亥年「小野苓庵分限」（『多門櫓文書』三三九四）がある。

祖父小野蕙畝　死　奥詰・醫師
父小野蕙畝寄合御醫師
小野苓庵　亥三十
高弐拾人扶持　本国山城　生国武蔵

當時下谷車坂門前御徒朝比奈兵八郎組山本源助地面借地父蕙畝同居仕罷在候

安政三辰年四月廿六日醫学館御薬園掛同年十二月廿四日醫業出精之趣達（平出）上聽　御詞御褒美被下置

同七申年三月十八日醫学館調合役取締文久元酉年十一月廿二日小笠原嶋江為御用被差遣御暇金弐枚時服二拜領同年十二月□日品川沖出帆同□九日小笠原嶋江着嶋

同二戌年三月廿八日御用仕舞□□仕彼地草木類取調腊葉集ニ仕立二冊物産識一冊献上同年四月廿三日歸府

初而御目見被　仰付同年八月三日於躑躅間右御用中骨折ニ付金弐枚拜領文久三亥年四月廿一日従部屋住新規被召出御番醫師被　仰付候

小笠原島への記事は、『続実紀』文久元年（一八六三）十二月廿三日条にも見える。

寄合醫師
蕙敬（蕙畝カ）惣領
小野苓庵

一　金貳枚
時服貳

伊豆國付島々。并小笠原島江罷越候者ニ、差添被遣候ニ付被下之。

右於躑躅間。若年寄中出座。右京亮申渡之。

（九）佐藤道仙・畑中文中・小堀祐真・宮地養三については、『続実紀』文政三年九月十五日条に、将軍家斎に拝謁を受けた医師として名が見える。

(一〇) 芦原検校英俊一（源道）については、加藤康昭『日本盲人社会史研究』（三六〇～一頁、未来社、一九八五）、その著書『鍼道発秘』（『臨床鍼灸古典全書』、オリエント出版社、一九八八）があり、横田観風「鍼道発秘講義」（1）（『医道の日本』五一一、六頁～、一九八七）を参照。

(一一) また、本史料には出てこないが、駒場の薬園監（預り）に植村家がある。植村家は『諸家譜』第十九（一八八～九頁）によれば、もと紀州藩に仕えていたが、享保元年（一七一六）に吉宗が江戸本城に入るときに初代政勝が従い、後に駒場の薬園監（預り）となった。

(一二) 柴田玄庵は、天保十四年七月朔日に将軍家慶に初見し、翌日の二日に取り立てられた。

(一三) 平塚惣検校東栄一（とえいち）は元治元年（一八六四）『平塚惣検校分限』（『多門櫓文書』一〇〇四三）によれば、

□□　和田彦兵衛死　相州鎌倉郡腰越村百姓
父　和田彦右衛門死　御府内浪人
高弐百俵　本国相模国　御針科　平塚惣検校
生国武蔵国　子六十七歳
内御足高　五拾俵
外御番料　百俵
□□□子年正月廿九□於京都被　召出三十人扶持□□
置奥御医師被　仰付同年三月十七日□検校江昇進罷成
同年四月□□日惣検校其侭□□□□之儀も是迄之通可
取計旨被仰渡候

と、祖父和田彦兵衛は相模国鎌倉郡腰越村の百姓で、父彦右衛門は府内で浪人であった。もと和田であったが、検校になった時には相模国鎌倉郡の出身と言うことで平塚を号したと考えられる。元治元年（一八六四）に六十七歳とあるので、寛政九年（一七九七）の生れである。元治元年正月二十九日に京都において召出され奥医師に仰付けられ三十人扶持を賜い、同年三月十七日に検校、四月に惣検校に進み廩米二百俵（内足高五十俵）番料百俵、計三百俵を賜った。

(一四) 辻元菘庵冬嶺については、小曽戸洋「都下　医家名墓散策（一八）辻元冬嶺」（『漢方の臨床』三六―一二、一九八九）を参照されたい。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史文献研究室客員研究員）